慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アルベール・カミュとシモーヌ・ヴェーユ
Sub Title	Albert Camus et Simone Weil
Author	片桐, 邦郎(Katagiri, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.104- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルベール・カミュとシモーヌ・ヴェーユ

片桐邦郎

シモーヌ・ヴェーユ（Simone Weil）は、一九四三年八月にイギリスで三十四才の短い生涯を閉じたユダヤ系フランス人で、フランスでは戦後になって問題視され始めた哲学者である。彼女の生涯を簡単に述べるならば、彼女は高等師範学校を卒業したあとリセの哲学教師となったが、のちに工場労働者となって働き、その体験からいくつかの労働問題に関する論文を書いた。行動的な彼女は、スペイン内乱の時は市民兵となり、また第二次大戦では、ユダヤ人としてフランスを追われてアメリカに渡ったが、抵抗運動に参加すべくまずロンドンに渡り、そこで病をえて客死した。その短い生涯に書かれた労働問題、哲学、宗教等に関する論文は、彼女の死後三年してアルベール・カミュ（Albert Camus. 1913—1960）の眼にとまり、その後カミュの手でつぎつぎに出版されて、世人の注目するところとなったのである。

この小論は、「アルベール・カミュとシモーヌ・ヴェーユ」と題してあるが、両者の思想の比較研究を意図したものではない。ヴェーユとカミュとは年令的には四才の差しかないが、ヴェーユの死んだ一九四三年にカミュの「シジフの神話」Le Mythe de Sisyphe が出版されていることから考えても、ヴェーユがカミュの影響をうけているとは考えられない。従って、もし両者の比較研究という場合

には、カミュが如何にヴェーユの影響をうけたかということになるのであるが、いままでのところ、この考察の資料となるものはそう多くはない。それにもかゝわらず、私がこゝに両者をならべたのは、カミュが、その晩年に、ヴェーユの著作の出版に異常な熱意を示していたと思われるからである。

今日、私たちがカミュの生涯をふりかえるとき、彼の創作活動のほかに二つの特筆すべきものに気付くだろう。その一つは、彼の演劇活動である。青年時代のカミュの劇団「労働座」Théâtre du Trarail から始まる活動は、晩年の数々の戯曲の飜案、脚色にいたるまで、一貫して彼の演劇に対する情熱を示すものである。しかしこの演劇活動よりも重要と考えられるものに、その二として、カミュの編集者としての活動があるのだ。戦争中から戦後にかけての「コンバ」Combat 誌の主筆としての彼の活動は衆知のことであるが、それ以上に注目しなければならないのが、カミュがヴェーユの作品を出版したことであろう。(カミュの監修によるガリマール社版の「希望」Espoir 叢書に含まれている。) ヴェーユの著書で、カミュによって出版される前に単行本となったものは、「重力と恩寵」La pesanteur et la grâce (1948. Plon) のみであるから、ヴェーユはカミュによって見出されたといってもよいだろう。(この意味から、カミュの編集者としての才能も高く評価すべきであると思われる。)

カミュによって相ついで出版されたヴェーユの作品は次のようなものである。

「根づき」L' enracinement (1949)

「超自然的認識」La connaissance surnaturelle (1950)

「ある修道士への手紙」Lettre à un religieux (1951)

「労働の条件」La condition ouvrière (1951)

「ギリシャの泉」La source grecque (1953)

「抑圧と自由」Oppression et liberté (1955)

「ロンドンの雑記及び最後の手紙」Ecrits de Londres et dernières lettres (1957)

さらに、カミュの死後、その名のもとに出版されたものに、

「歴史と政治雑録」Ecrits historiques et politiques (1960)

「神の愛に関する雑感」Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu (1962)

がある。

カミュがこのように情熱をかたむけてヴェーユの作品を出版したことから、直ちに、カミュがヴェーユの影響をうけたかどうか、うけたとすればそれは如何なるものか——ということを充分証拠立てて答えることは出来ない。しかしながら、カミュがヴェーユに示したこの関心から、少くともカミュのうちにヴェーユの思想が重要な位置を占めていたとはいえるだろう。私のこの小論は、さきに述べたように、両者の思想の比較ではなく、カミュがヴェーユに注目した事実から、その背景をさぐり、それを明らかにすることによって、カミュの思想に対して一考察をすることを目的としている。

まずカミュについて考えよう。カミュは、その死後まだ六年しかたゝないが、すでに Bibliographie だけでも数冊も出版されるほどで、その研究書は挙げきれぬほど多い。しかし、それらのカミュ研究を大ざっぱに分けてみると、二つにわかれるようである。その一つは、カミュの思想にいくつかの段階的な発展をみるものであり、(このような見方は、カミュ自身もしていることに注意しよう。)もう一つは、その思想発展のうちに一種の不動性を指摘しているものである。

まず段階的な発展について述べよう。カミュは「手帖」Carnets の中で、自分自身の作品をいくつかの系列に分けて、(一九四七年六月のノート。)

第一の系列。不条理・「異邦人」——「シジフの神話」——「カリギュラ」と「誤解」。

第二の系列。反抗・「ペスト」(及び、補遺)——「反抗的人間」——「カリアエフ」

等と分類している。Carnets II. P. 201 (「カリアエフ」とは「正義の人々」Les Justes のことである。)

また、その後、彼自身で自己の思想を示すものとして、(一九五〇年のノート。)

I、シジフの神話（不条理）。——II、プロメテの神話（反抗）。——III、ネメシスの神話。

とも記している（Carnets II. p. 328）このうちIIIのネメシスの神話には（　）がないが、ネメシスについては、たとえば、

「復讐の女神でなく、節度（mesure）の女神として、ネメシスは眼覚めている。限度を超えるものはすべて、彼女によって容赦なく罰せられる。」L'été. p. 108 L'Exil d'Hélène より(1948)。（この文章と類似したものが（Carnets II. p. 198 にもある。（1947°））という。これらの言葉と考え合せるとき、「ネメシスの神話」の下に、（節度）と加えることは不当ではないであろう。極めて図式的だが、不条理——反抗——節度、というのが、カミュ自身が自己の思想発展を示したものでもあり、またカミュの思想の展望における定説でもあるのだ。

ところで、不条理から反抗への移行の年代は、作品で云えば、「誤解」(1944) から「ペスト」(1947) に移る頃であるから、第二の、つまり、カミュの思想に発展性よりも不動性を指摘した批評は、年代的に云えば一九四七年以後になるであろう。

たとえば、一九四九年にガエタン・ピコン Gaëtan Picon は、

「カミュが彼の反抗と情熱の極限にまで行きつかないのは、残念に思われる。われわれは〈宙ぶらりんになっているエネルギー、中途でとめられた力の印象〉をうけるのである。自己統禦、節度、抑制された情熱というような古典的な趣味が、平衡と、叡智への道徳的意志と一緒になっているのだ。……カミュを脅かす危険は、彼の特質そのもののなかに含まれている。彼は解脱から貧困へ、静謐から無気力へ、平衡から不動（immobilité）に移る虞れがある。」Panorana de la nouvelle littérature française. p. 101

と云っている。また、一九五〇年にエマニュエル・ムニエ Emmanuel Mounier は、

「一種の静寂主義（quiétisme）がカミュの精神性への永久の誘惑であるように思われる。コントラストと斗争を好むアフリカ的な激しさがカミュとともにこの誘惑とたたかっている。彼の思想の歩みにあれほど意志的な調子と、規律への情熱が見出されたのはおそらくこの理由からであろう。無関心あるいは放任という地中海的な幸福な眠りを鞭打たねばならない——と。対話をするときでさえ、カミュはいつも投げやりと戦っているようである。」E. Mounier: Albert Camus, ou l'appel des humiliés,《Esprit》(Janvier, 1950) と

述べている。

〈不動〉immobilité といゝ、〈静寂主義〉quiétisme というこれらの批評が、カミュの「反抗的人間」(1951) の出版される前にすでに指摘されたものであることは、特に注意する必要がある。(サルトル・カミュ論争は五二年のことである。) その後のカミュはどうであったか。サルトルとの論争後八年、自動車事故によるカミュの不意の死のあとでジャック・マドール Jacques Madaule は、

「宗教的信念か政治的信念のどちらでも構わない。私はこれらが等価値だとは云わない。しかし、このいずれかがあったなら、それが、彼が落ち込んでしまったのではないかと恐れている不毛 (stérilité) から彼を救ったであろうにと云いたい。……」

J. Madaule : Camus et Dostoïevski, La table ronde (février 1960) p. 136

〈不動〉、〈静寂主義〉、〈不毛〉という言葉は異なるがカミュの思想の発展を否定するべきものを含んでいることは間違いない。

私は、カミュの思想を考察する場合に、表面的な発展性でとらえるよりも、その裏面の〈不動〉〈静寂主義〉に注目すべきであると思う。さうして、この〈不動〉〈静寂主義〉については、ムニエも云っているように、ジャン・グルニエ Jean Grenier の名をあげねばならないだろう。カミュに思想的影響を与えた作家として (それはカミュ自身も認めているのだが) ジャン・グルニエは重要であるが、まだあまり両者の比較研究はされていない。ロジェ・キヨ Roger Quilliot は、グルニエの「諸島」Les iles (1933) がカミュの「裏と表」L' Envers et l' Endroit (1937) や「結婚」Noces (1938) に影響を与えたことを指摘しているが、グルニエの影響はカミュの初期の作品にとどまってはいない。「反抗的人間」L' homme révolté (1951) の中でカミュは、たとえば、グルニエの「正統的精神に関する論文」Essai sur l' esprit d' orthodoxie (1938) や、「自由の善用についての対話」Entretiens sur le bon usage de la liberté (1943) などを高く評価している。(L' homme révolté. p. 274. p. 355)

また、カミュは「手帖」の中でも、各所でグルニエについて述べているし、カミュの著作のいくつかは、グルニエに捧げられている。この小論はカミュとグルニエとを比較するのが目的ではないから、簡単に結論を述べよう。Lao-Tzeu (老子) の Taoisme (道教) における〈無〉néant や〈絶対〉absolu に関心をもつグルニエには、まさにピコンのいう〈不動〉、ムニエのいう〈静寂主義〉の傾向

が強かったのである。

カミュは、この意味からのグルニエの影響を受けていたし、また、そこからぬけ出そうともしていた。例をあげよう。グルニエの「諸島」に示された〈無関心〉indifférence と、カミュの「結婚」の中の一章「沙漠」（この章はグルニエに捧げられている。）に示された〈無関心〉と如何に似ているか、比較してみればわかることだ。「諸島」が出版されたとき二〇才のカミュは、グルニエのいうように地中海の風土に感じられる〈無関心〉に目を開かれたことは想像にかたくはない。その後、グルニエはこの〈無関心〉をおし進めて De l' Indifférence (1945), A propos de l' humain (1955) と発展させてゆくのであるが、一方カミュは、この〈無関心〉と対決してたゝかう。後年、彼は云っている。

「生まれつきの無関心を正すために、私は貧困と太陽の中間に置かれたのだ」L' Envers et l' Endroit の序文。p. 2 Janv. 1958. N. R. F.（一九五四年に書かれた。）

こゝでカミュのいう〈無関心〉が、あのムニエのいった「地中海的な幸福な眠り」であることは間違いない。そうして、ともすればカミュを誘惑するこの〈無関心〉を正すために、彼は断えざるたゝかいを続けねばならない。こゝで彼が示した〈貧困〉とは、同時に彼の作品にある〈孤独〉であり、〈死〉であり、〈不条理〉につながるものであり、〈太陽〉とは、〈生の喜び〉であり、〈幸福への嗜好〉につながるものであろう。〈結婚〉から「シジフの神話」に至るカミュの思想の展開は、すでによく知られたものであるが、その特徴として注意しなければならないことは、それが極めて内的なものであり、個人的な性格を帯びているということである。しかも、更に重要なことは、この内的なところでのたゝかいを続けねばならないカミュにとって、社会的政治的な問題が加わることで、このたゝかいが二重になるということである。つまり、風土のうちにある無関心とのたゝかいに加えて、アルジェリアを故郷とするカミュは、

「……植民地問題が、すでに二十年も前に、私が太陽の完全な陶酔に身をまかせるのをさまたげた……」Actuelles II. p. 105（一九五二年、サルトルに宛てた手紙）

のであり、植民地問題ばかりでなく、第二次大戦においても、

「何年も前から、君たち（ドイツ人）は私を歴史のなかに入らせようとしている……君たちはなすべきことをやった。私たちは歴史のなかに入ってしまった。そして五年間というもの、もう小鳥の鳴き声をたのしむことはできなかった。」Lettres à un ami allemand

（この文は、サルトルが、〈歴史〉に対するカミュの矛盾をついて、返事のなかで引用したものである。）

カミュの思想は、前に述べたように、「異邦人」から「ペスト」に、「シジフの神話」から「反抗的人間」へと、個人から集団に、不条理から反抗へと発展したといわれている。しかしながら、その集団的段階と考えられる時においても、如何に個人的な欲求が、つまり、あの幸福への嗜好が、太陽えの陶酔が強かったかを注意しなければならない。それと同時に、更に大事なことは、社会的政治的な問題を前にして、これらの個人的な欲求は強かったけれども無力であったということである。「ペスト」が出たあとで、さきに述べたピコンやムニエの批評が出たことをもう一度思い出そう。そうして、「ペスト」（一九四六年）から「反抗的人間」（一九五一年）の間に、カミュは、ピコンのいう〈不動〉、ムニエのいう〈静寂主義〉におち入らないために、反抗の論理をかためたとは云えないであろうか。

「反抗的人間」が、カミュ・サルトル論争をおこし、その結果がどうであったかについては、こゝではふれない。私がいま指摘したいのは、カミュがこのような状況のもとで、ヴェーユをみつけ、ヴェーユをみつめたのだということである。

カミュがヴェーユの作品を始めて読んだのはいつ頃であったか――については、ロジェ・キヨのカミュ研究書である「海と牢獄」La mer et les prisons（1956）によらねばならない。この書の冒頭のカミュの伝記の中で、一九四六年に、「シモーヌ・ヴェーユの作品を見出す」p. 15 とある。一九四六年とは、「ペスト」が書かれた年であるが、同じ書の中でキヨは「ペスト」の作中人物の一人タルーの行動を説明するのに、ヴェーユの「ベルナノスへの手紙」と「重力と恩寵」の一節を引用しているが、（p. 176）その註には、

「しかしながら、カミュが「ペスト」を書き終ったあとでヴェーユの作品を見出したことを明らかにしよう。」とも云っている。

従って、カミュがヴェーユの作品を読み、その影響をうけたとしても、それは「ペスト」より後になるのである。事実、カミュの著作にヴェーユの名が記されているのは、たとえば「手帖」では一九四八年四月以降であり、（カミュは「手帖」の中では、ヴェーユの

ことを Simone Weil, S. Weil, S. W. といろ〳〵に記している。）具体的にヴェーユの作品の名前をあげているのは「反抗的人間」（1951）の中でである。

ところで、ある作家が他の作家の作品を読み、その中のいくつかの文を引用したからといって、直ちに思想的に強い影響をうけていると断定することは早急であり、そこに共通点、類似点があるからといって、必ずしも影響があったとは考えられない場合もあろう。実際にカミュは、一九五二年にマルセル・モレ Marcel Moré の論説に答えた中で、

「……あなたは、私がキリスト教の十全の形といぶグノーシス派、カタル派、ジャンセニストなどに私が共鳴しているという。私にはその理由がわからないのだが、あなたはその責任がシモーヌ・ヴェーユにあると疑っている……」Actuelles II p. 66

と云って、ヴェーユの影響を否定しているのである。

カミュとヴェーユとの比較は、カミュとグルニエとの比較と比べて、資料が極めて少い。そこで、単なる推論でなく考察するためには、その僅かな資料から始めなければならない。まず、カミュがヴェーユの作品名をあげている「労働の条件」La condition Ouvrière から始めよう。

「……労働の合理化がどの程度の精神的衰退、沈黙の絶望に達するかを知るには、シモーヌ・ヴェーユの工場労働者の条件に関する論文、（「労働の条件」）を読むべきである。シモーヌ・ヴェーユが労働条件は二重に非人間的である。第一に金銭、第二に尊厳性を剝奪されているといっているのは正しい。L'homme révolté p. 267

数少ないカミュとヴェーユを比較した批評の一つであるマリー・マドレーヌ・ダビィの Camus et Simone Weil, La tadle ronde, (fév. 1960) では、ヴェーユが指摘した工場労働者の仕事の単調性、非人間性と比較して、カミュの「シジフの神話」の中の「起きる。電車。事務所または工場で四時間。食事。電車。四時間働く。食事。睡眠。そして、月火水木金と同じ調子ですぎて行く。」p. 77. をあげている。しかし、ダビイのこの対比は適当とは思われない。たしかにこの両方はそれぞれ内容においては似かよっている。しかし乍ら「シジフの神話」を書いたとき、カミュはヴェーユの著作を読んでいないし、ヴェーユもまたカミュを知らない。いわば、偶然

の類似でしかない。カミュのなかから（ヴェーユを読んだあとでの）工場労働者に対する言葉を拾うならば、次のごとくである。

「労働者の居住区域に貧しく生れながら、それでも私は、この冷たい場末の区域を識るまでは真の不幸の何であるかがわからなかったのだ。……しかし、一旦この工場労働者達を知ったなら、ひとは、もう永遠にその記憶を拭えず、彼らの生活に責任ありと感ずるであろう。」L'Envers et l'Endroit の序文 p. 4 1er Janv. 1958. N. R. F.

カミュは労働者とその貧困について語っている。しかし、彼のいう〈貧困〉とは、「貧困は私にとって豪奢であった。」L'été: p. 167 のであり、「工場労働者の生活に責任ありと感ずるであろう。」という反面、同じ序文のなかで、「貧困は私にとって不幸ではなかった。」p. 2「いずれにせよ、私の少年期を支配していた美しい太陽は、私から一切の怨恨を奪いとった。私は窮乏生活を送っていたが、また同時に一種の享楽生活を送っていた。」p. 3 とも云っているのである。つまり、カミュにとって〈貧困〉とは、前にも指摘したように、孤独や死と同じく、不条理の感覚をよび起す素材の一つでしかなく、極めて個人的なものなのである。たとえ「工場労働者の生活に責任あり……」と云っていても、〈工場労働者たちの貧困〉を考え、その対策をねるといったものではないのである。この意味からも、前述の「シジフの神話」の引用によるダビイの対比は二重に間違っていることになる。「シジフの神話」は結局は「幸福なシジフを思わねばならない。」p. 186 という幸福追求の書なのである。

ヴェーユにとって、〈貧困〉とか〈幸福〉とかは、どうであったろうか。

「人生の現実とは、感覚ではなく、活動（activité）である。」La condition Ouvrière p. 25 Lettre à une élève と云う彼女は、哲学教師の職を捨て、自ら労働者になっての生活体験から、労働者の生活感情、その環境をとらえたのである。彼女にとっては、〈幸福〉よりも〈不幸〉が追求のテーマとなっている。

「なにものも不幸を識ることよりむずかしいことはない。それは常に神秘である。ギリシャの格言がいっているようにそれは唖である。不幸のニュアンスと原因をとらえるために内的な分析を準備しなければならないが、一般に不幸な人々にはそれが出来ない。」La Condition Ouvrière p. 251 Expérience de la vie d'usine 彼女が労働者の不幸や貧困について語るのは、労働者にかわって語っている

のである。そのヴェーユにとって〈幸福〉とは如何なるものであろうか。ダビィは云っている。

「シモーヌ・ヴェーユは、ある人々がそう思っていたように幸福を拒んでいるのではない。彼女は、他の人々が苦しんでいる時に、完全に幸福にはなれないのである。」Camus et Simone Weil, La table ronde, février 1960. p. 138

このように両者を比較するとき、カミュの世界が、感覚的で、幸福追求という個人の内部にこもりがちな性格をもっているのに対して、ヴェーユの思想が、体験的で具体性をもつとともに社会性があることを知るだろう。しかも、ヴェーユにおいては問題提起のみならず、それに対する具体的な対策も考えられているのである。「非奴隷的労働の第一条件 Condition première d'un travail non servile (La condition ouvrière の最後の項。1941～42) は、今日からみればいろ〳〵と批判もあろうが、ヴェーユがその体験から考え出した解決策であるのだ。

カミュはこの点でも全く反対である。「工場労働者に責任ありと感ずる……」と云っているが、具体的な結論は示していない。むしろ彼によれば、

「ある思想家が進歩するのは、彼には明らかであるような時でさえも、自分の結論を遅らせることによるのである。」Cornets II p. 33

このようなカミュをモーリス・ジャン・ルフェーブは次のように評している。

「アルベール・カミュの偉大さは、彼が決して結論を出さなかったことからくるということが、いつかわかるであろう。」Deux états d'une pensée p. 491 N. R. F. 1er Mars 1960

ヴェーユとカミュとの、この全く相異した態度のどちらが正しいかということは問題ではない。結論を遅らせたまゝ遂に自動車事故でカミュは死んだ。そうして、その晩年は、マドールのいうように〈不毛〉であったが、そのカミュがヴェーユに注目していたことは、あのグルニエの影響とも思われる〈不動〉〈静寂主義〉をのり越えるために、ヴェーユが必要だったからではなかろうか。カミュが相ついでだしたヴェーユの著作が、「希望」Espoir という名の叢書に含まれたことは、単なる偶然かもしれないが、象徴的と思われ

る。（カミュが初期の作品の中で〈希望〉をしめ出そうとしたことを思い出してみよう。）

カミュとヴェーユとの比較は、他にもいろいろ考えられる。たとえば、カミュは「反抗的人間」の中でヴェーユの「われわれはプロレタリア革命に向って進むか」をあげている。これは一九三三年四月二五日の「プロレタリア革命」にのせられたもので、後に「抑圧と自由」Oppression et liberté（1955）に入られたものだが、カミュの革命観に与えた影響は大であったと思われる。また、両者の比較で殆んど影響の認められないものに宗教観がある。（この点では、むしろグルニエの影響が強かったように思われる。）カミュと他の作家との比較はグルニエのほかにもいろ〳〵考えられる。（たとえば、ルネ・シャール René Char など。）しかし、カミュの転期ともいうべき頃に始まり、その死まで続いたヴェーユへの指向は、他の作家ほど具体的な影響が示されていなくても、カミュを知る上で最も重要であると思われる。事故による不意の死とはいえ、最後までヴェーユに誘かれていたカミュの姿こそは、カミュの誠実さを示すものではなかったろうか。

註　シモーヌ・ヴェーユについてのわが国でのまとまった研究は少いが、主なものを記すと、次のごとくである。

○加藤周一「新しい人間という問題」
（岩波講座「現代思想」二、（一九五六年）

○加藤周一「シモーヌ・ヴェーユと工場労働者の問題」
（「世界」一九五七年二月号

以上二つは、同氏の「現代ヨーロッパの精神」（一九五九年、岩波書店）に集められている。

○大木　健「シモーヌ・ヴェーユの生涯」（一九六四年　勁草書房）

○橋本一明「不幸への捨身――シモーヌ・ヴェーユ」
（「世界文学」一九六六年夏号）

○石川　湧訳「抑圧と自由」
（創元新社）